デッサウ、ある地方工業都市の肖像（一）

武田　竜弥

1　はじめに

ベルリンの南西およそ一一〇キロメートル、ザクセン＝アンハルト州の中東部にその町はある。古い歴史をもつが、二〇〇七年にエルベ川を挟んだ北隣の町と合併したため、現在は独立した行政市ではない。

まずは斜陽の地方都市といってよいであろう。旧東ドイツ時代を通じてわずかながらも増加していた町の人口は、一九九〇年のドイツ再統一以来、三〇％近くも減ってしまった。合併後の状況を見ても、二〇一九年の合併市の平均失業率は七・七％、全ドイツの平均五％を顕著に上回る。注目されるのは若者の少なさだ。同じ年の二五歳以下の人口比は全ドイツで

二四％、しかしこの市では一八・一％にすぎない。逆に五五歳以上の人口比は全ドイツで三六・六％、この市では四八・七％に上る[1]。老いと停滞が町を覆っている。

旧東ドイツの町としては、さほど珍しい光景ではないのかもしれない。再統一後の東西格差は一向に解消される気配がなく、仕事のないところに若者は集まらない。だが、それでもやはりこの町の光景にある種の感慨を覚えざるを得ないのは、町のそこここに、かつての若く喧騒に満ちた時代の残像が見て取れるからである。

中部ドイツの工業化に寄与することになるガス会社がこの町に設立されたのは、一八五五年のことである。これを機に、町は小さな宮廷都市から工業都市へと姿を変えていった。一八八六年にはドイツで二番目となる発電所がこの会社によって作られた。そこに、ベルリンから一人の男がやってくる。男はガスモーターの開発で特許を取り、やがて自身の会社を立ち上げた。そして一九一九年、男は世界初の全金属製航空機をこの町の空に飛翔させた。同じ頃、歌劇場では、のちに「怪物」とも称される指揮者がドイツ最年少の音楽監督になろうとしていた。その六年後には、二〇世紀の建築あるいはデザインに少なからぬ影響を与えた造形学校がヴァイマールから移転してきた。美術好きなら知らぬ者とていない画家らが教鞭をとり、世界中から多くの才能が集まった。

しかし、輝かしい時代は長くは続かなかった。一九三二年、ナチス主導の議会で件の造形学校の閉鎖が決議された。翌年にはかの航空機会社が国家の管理下に置かれ、創業者の男は町から追放された。民間航空の夢が紡がれた工場では爆撃機が製造されるようになり、各地の収容所から多くの強制労働者が集められた。町のシンボルでもあった製糖工場は、アウシュヴィッツなどで使われた毒ガス、ツイクロンBの製造工場となった。そして第二次世界大戦末期、数次にわたる連合軍の空襲により、町は灰燼に帰した。

光と影のコントラストが奥行きを生み出すとするならば、この時代の、この町の肖像ほど鮮やかな奥行きに富んだものも少ないだろう。確かにそれは小さな肖像かもしれない。この地方都市がドイツ史において主役を演じる機会など、ついぞなかったといってよい。しかしそれでも、そこには間違いなく目を向けるに足る奥行きがある。その奥行きが言葉を誘ってやまない。

今日、老いと停滞に覆われたこの町のそこここに見出される残像とは、かかる肖像の、時を経た断片に他ならない。本論考では、それらの断片を遡行し、類まれなコントラストに彩られたこの町の肖像を読み解いていきたい。町の名を、デッサウという。

2　アンハルトの都

ザクセン＝アンハルト州のほぼ中央に、かつてアンハルト公国（一八六三～一九一八年）という名の小さな領邦があった。世襲君主はアスカニア家。中世にはブランデンブルク辺境伯やザクセン公（いずれも選帝侯）なども輩出した名門の家系である。しかし度重なる分割相続などの結果、すでに一八世紀には祖領のアンハルトにいくつかの分家が領地を構えるだけの小貴族となっていた。当時の主な諸侯は、アンハルト＝デッサウ、アンハルト＝ケーテン、アンハルト＝ベルンブルク、アンハルト＝ツェルプストの四家で、残りはその傍流といってよい家柄である。

一八世紀前半のアンハルト＝デッサウ家は、領邦君主としてよりも、むしろプロイセンの軍人一族として名を馳せた。その筆頭に挙げられるのが、一六九三年に同家を継いだレオポルト一世である。レオポルトは一七歳でブランデンブルク選帝侯軍（のちのプロイセン王国軍）の大佐となり、スペイン継承戦争（一七〇一～一四年）などで活躍、一七一二年には軍の最高司令官である元帥（Generalfeldmarschall）に任じられた。また彼は、急速に拡大しつつあったプロイセン軍の育成にも力を発揮し、軍事強国プロイセンの礎を築いた。軍内での声

望は比肩する者がなく、周囲からは親しみを込めて「デッサウ老」と呼ばれた。

歴代のプロイセン王も同家には絶大な信頼を寄せ、彼の後を継いでアンハルト＝デッサウ侯となったレオポルト二世マクシミリアン、その弟のディートリヒ、モーリッツまでも相次いで元帥に任命している。先代の父ヨハン・ゲオルク二世もブランデンブルク選帝侯軍の元帥であったから、親子三代で都合五人の元帥を出したことになる。このような家など、プロイセンの歴史を通じて他にはない。オーストリア継承戦争（一七四〇～四八年）でプロイセンがシュレージエンの確保に成功したのも、この親子の働きによるところが大きい。

一方、アンハルト＝ケーテン家はこれとは大分趣が異なっていた。一七〇四年、父エマヌエル・レープレヒトの急死により、息子のレオポルト（デッサウ家とは別人）がわずか一〇歳で同家の当主となった。しかし幼い彼に君主としての仕事ができるはずもなく、母が摂政となり、彼はベルリンの騎士学校で教育を受けることになった。ところがそこで彼は音楽の虜となってしまう。一七一〇年に同校を卒業すると、彼は当時の貴族の習いであった「グランドツアー」に出かけるが、デン・ハーグ、ロンドン、ヴェネツィア、ローマ、ウィーンなど、行く先々で音楽三昧の生活を送った。ちょうどデッサウ家のレオポルトがスペイン継承戦争を戦っていた頃のことである。

そして一七一三年、ケーテンに戻った彼は、早速自前の宮廷楽団の結成に取り掛かった。折しもベルリンでは「兵隊王」フリードリヒ・ヴィルヘルム一世によって宮廷楽団が解散させられたところだったので、そこから腕利きの音楽家を集めることができた。初代楽長ラインハルト・シュトリッカーもその一人である。シュトリッカーは一七一七年の夏まで楽長を務め、その年の末に二代目の楽長が破格の待遇をもって迎えられた。ヨハン・ゼバスティアン・バッハである[2]。

自身も優れたバス歌手であり、ヴァイオリンやチェンバロなども演奏したレオポルトは、バッハを友人のごとく遇し、その活動に様々な便宜を与えた。この恵まれた環境の下でバッハは、「ブランデンブルク協奏曲」(BWV1046-1051)、「無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ」(BWV1001-1006)、「無伴奏チェロ組曲」(BWV1007-1012)、「平均律クラヴィーア曲集第一巻」(BWV846-869)など、数々の傑作を生み出した[3]。この時代の彼の作品に教会音楽が少ないのは、レオポルトが礼拝に音楽の使用を禁じるカルヴァン派の信者だったからである。バッハがライプツィヒの聖トーマス教会のカントルとなるべくケーテンを去ったのは一七二三年。その五年後にレオポルトは亡くなった。同じアスカニア系のアンハルト貴族でありながら、軍務に明け暮れたデッサウ家とは全く違った生涯であった。

ところがその後、両家の間に不思議な逆転現象が起こる。ケーテン家ではレオポルトの嫡男が早世（父と同年に死去）していたため、弟のアウグスト・ルートヴィヒが家督を継ぐことになった。そして一七五五年にその息子のカール・ゲオルク・レープレヒト、一七八九年に孫のアウグスト・クリスティアン・フリードリヒが同家を継承したが、この二人はともにプロイセン軍の将軍となったのである。

一方デッサウ家では、一七三七年にレオポルト二世マクシミリアンがケーテン家レオポルトの忘れ形見ギーゼラ・アグネスと結婚し、三年後に嫡男をもうけた。のちのアンハルト＝デッサウ侯（公）レオポルト三世フリードリヒ・フランツである。一七五一年に当主となったフランツは、同家の慣例に従ってプロイセン軍に入り、七年戦争（一七五六～六三年）に出征した[4]。ところが叔父モーリッツとともに参加した一七五七年のコリンの戦い（プロイセンがオーストリアに大敗）の後、彼は俄かにデッサウに戻り、以後軍への復帰を拒否したのである。

もちろん、これまでの関係からして、デッサウ家の当主がプロイセン軍から離脱するなど容易なことではなかった。怒ったプロイセン王フリードリヒ二世（大王）はデッサウ家に莫大な軍事負担を課し、七年戦争後にはその大王の意に適うべく、フランツはプロイセンの傍

流ブランデンブルク＝シュヴェート家のルイーゼと結婚した[5]。またフランツに代わって彼の二人の弟、ヨハン・ゲオルクとアルベルト・フリードリヒがプロイセン軍に入り、のちにはフランツとルイーゼの子フリードリヒも同じ道を辿った。しかしそれでも、フランツ自身は二度と軍には戻らなかった。

七年戦争が終わると、フランツは待ちかねたようにイギリス旅行に出た。当時のイギリスは産業革命の勃興期で、フランツは自国には見られない制度や文化を学ぼうと精力的に各地を視察して回った。彼のイギリスに対する愛着は大きく、同国への訪問は都合四回（一七六三～六四年、一七六六～六七年、一七七五年、一七八五年）に及んだ。

イギリスの次はイタリアであった。フランツは一七六五年の秋から一年余りもイタリアに滞在し、古代の建築や美術について学んだ。ローマでは新古典主義美学の理論的支柱であったヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマンからも教えを受けた。帰路にはイギリスを再訪し、旅行は一八か月の長きにわたった。

デッサウに戻ったフランツは、これまでに得た知見を活かそうと、矢継ぎ早に新たな施策を打ち出した。道路や住宅の整備、農地の拡大、火災保険の導入、救貧院の設立、公報の発刊、教育改革[6]、劇場の建設、まさに手当たり次第という風であった。もっとも、彼の施策

は良くも悪くも啓蒙専制君主のそれで、あれこれと命令を下す割には計画性に乏しく、十分な成果を挙げられないまま頓挫してしまったものも少なくなかった。一八世紀後半のドイツでは、プロイセンのフリードリヒ二世やオーストリアのヨーゼフ二世のような大国の君主ばかりでなく、中小の領邦君主の中にも啓蒙主義に傾倒する者がいたのである[7]。

フランツの業績の中で今日でもデッサウの文化遺産として高い評価を得ているのが、大陸ヨーロッパ最大ともいわれるイギリス式庭園の造営である。一八世紀のイギリスでは、それまでヨーロッパで主流であった幾何学的構成の庭園に代わって、自然風景を模した庭園様式が流行するようになっていた。大のイギリス贔屓であったフランツはこれに魅了され、旅の供でもあった建築家のフリードリヒ・ヴィルヘルム・フォン・エルトマンスドルフらに命じて大規模なイギリス式庭園を造らせた。庭園の現存部分一四〇平方キロメートル余りは、二〇〇〇年に「デッサウ・ヴェルリッツの庭園王国」としてユネスコの世界文化遺産に登録され、デッサウの観光名所となっている。かくしてケーテン家レオポルトの血を引いたフランツは、軍人とは別の形で名を残すことになったのである。

アンハルト＝ツェルプスト家についても紹介しておこう。一六九〇年、ツェルプスト家の分家にクリスティアン・アウグストという人物が出た。クリスティアンは一八歳でプロイセ

ン軍の士官となり、スペイン継承戦争や大北方戦争（一七〇〇～二一年）で活躍した。軍でも順調に昇進し、一七四二年にはフリードリヒ二世によって元帥に任じられるとともに、後嗣の絶えた本家ツェルプスト家の家督も相続した。ところがそこに、娘ゾフィー・アウグステ・フリーデリケの結婚話が持ち上がった。相手はロシアの皇太子ピョートル・フョードロヴィチ、のちの皇帝ピョートル三世である[8]。当時プロイセンはオーストリア継承戦争の最中で、フリードリヒ二世はロシアとの友好関係を望んでいた。自らが任命した元帥の娘がロシアの皇太子妃になるというのは、願ってもない話であった。結局、ゾフィーは一七四五年にピョートルと結婚し、その二年後にクリスティアンはこの世を去った。しかしこの結婚がツェルプスト家の運命を狂わせることになった。

一七五六年に七年戦争が始まると、ロシアはプロイセンの弱体化を狙い、オーストリア側に立って参戦した。離反を疑われたツェルプストはプロイセン軍の進駐を受け、クリスティアンの跡を継いでいた息子（ゾフィーの弟）のフリードリヒ・アウグストは国外への逃亡を余儀なくされた。ところが一七六二年、ロシアではフリードリヒ二世を敬愛するピョートル三世が即位し、プロイセンとの単独講和に踏み切った。すると夫婦関係が破綻していたゾフィーがこれに反発、ロシア貴族の支持を得てクーデターを起こし、自ら皇帝に即位した。エ

カチェリーナ二世である。

これによりプロイセンとツェルプスト家との関係は修復不可能となり、七年戦争の終結後もフリードリヒは自領に戻れないままとなった。そして一七九三年、フリードリヒが子を得ずにルクセンブルクで亡くなると、ツェルプスト家は断絶となり、領地は他のアンハルト諸邦（デッサウ、ケーテン、ベルンブルク）によって分割されることとなった。アンハルトはこの体制でナポレオン戦争の渦に巻き込まれていくのである。

ナポレオン戦争はドイツの歴史に一大転機をもたらした。三〇〇余りもあった領邦はわずか四〇ほどに整理され、神聖ローマ帝国は名実ともに消滅した[9]。一〇年以上も続いた戦いによる人的・経済的被害も甚大であった。

だが、生き残った諸邦にとっては、結果は必ずしも悪いものではなかった。プロイセンやバーデン、ヴュルテンベルクなどは大幅に領土を拡張し、新たな王国、大公国、公国が続々と誕生した。アンハルトもこの「勝ち組」であった。

神聖ローマ帝国の解体が目前に迫った一八〇六年四月、ベルンブルク家の当主アレクシウス・フリードリヒ・クリスティアンが皇帝フランツ二世から公爵の位を得た。これによりベルンブルクは、侯国（Fürstentum）から公国（Herzogtum）に成り上がった。他の二国も負け

てはいなかった。帝国の解体後、イェーナ・アウエルシュテットの戦い（同年一〇月）でプロイセンが大敗すると、翌年、アンハルト三国はそろってナポレオンを盟主とするライン同盟に加盟した。デッサウ家のフランツとケーテン家のアウグストは、これを機にナポレオンから公爵の地位を認められ、両国もまた公国への昇格を果たした。そして一八一三年、今度はナポレオンがライプツィヒの戦い（諸国民の戦い）で敗北すると、アンハルト三国は手のひらを返したようにライン同盟を離脱し、対仏大同盟軍に加わった。その結果、アンハルトは格上げされた公国としてナポレオン戦争を乗り切ることに成功したのである[10]。大国の思惑のはざまで、うまく立ち回ったといえるだろう[11]。

ナポレオン戦争後、ウィーン会議（一八一四～一五年）において、新たなドイツの枠組みが決められた。ドイツ連邦である。連邦とはいうものの、統一された連邦国家ではなく、独立した君主国と都市からなる緩やかな連合体にすぎなかった。しかもハノーファー王国はイギリスと、ルクセンブルク大公国はオランダと、ホルシュタイン公国とザクセン＝ラウエンブルク公国はデンマークとそれぞれ同君連合を形成していたので、半ば国際機関のようなものでもあった。当初の構成国・都市は、オーストリア帝国、プロイセンなど五王国、ヘッセン選帝侯国、バーデンなど七大公国、アンハルト三国を含む一〇公国、小諸侯の一〇侯国、

フランクフルトなど四自由都市の計三八、一八一七年にヘッセン＝ホンブルク方伯国が加わって三九となった[12]。フランクフルトに常設の議会が置かれ、オーストリアが議長国を務めた。もちろん、中央政府といったものはなかった。

では、ドイツ連邦下におけるアンハルトの動きを見ていこう。一八一七年、デッサウ家のフランツがその波乱に満ちた生涯を閉じた。かつての啓蒙専制君主も、フランス革命後は保守化する一方だった。公爵となった翌年（一八〇八年）には、自らの親政五〇周年を祝う式典を大々的に挙行している。近世の終焉を生きた君主として、まずは大往生だったといえるだろう。嫡男が一八一四年に亡くなっていたので、家督は孫のレオポルト四世フリードリヒが継いだ。彼もまた当時としては長命で、その治世は一八七一年、ドイツ帝国が成立するまで続いた。この点、ドイツ連邦の成立を見届けて亡くなったフランツと似ていなくもない。このレオポルト・フリードリヒの治世下でデッサウは宮廷都市から工業都市へと少しずつ変貌していくのであるが、これについては次節以降で論じる。

ケーテン家のアウグストは、一八一二年にこの世を去った。彼はもともとプロイセンの軍人だったが、のちにナポレオンの信奉者となり、自国でナポレオン法典の導入やユダヤ人の解放などを行った。一八一三年にアンハルト三国は対仏大同盟側に寝返るが、もし彼が存命

であったら混乱が生じていたかもしれない。アウグストには子がなかったので、家督はわずか一〇歳の甥（兄の子）ルートヴィヒ二世が継いだ。もちろん政務を執れる年齢ではなかったので、当時アンハルト諸家の最年長者（家長）であったフランツが後見となった。保守化していたフランツは、アウグストの定めた「憲法」を直ちに停止した。

一八一八年にルートヴィヒ二世が亡くなると、ケーテン家の本流は絶え、家督は傍流のフェルディナント・フリードリヒに移った。しかし一八四七年、フェルディナントの弟ハインリヒの代を最後にこちらも後嗣がいなくなり、ケーテン家はついに断絶となった。領地は当初デッサウ家とベルンブルク家によって相続されるはずだったが、時のベルンブルク公アレクサンダー・カール（アレクシウスの子）がその権利を放棄したため、デッサウ家が単独で相続することになった。そうした中、時代の大きな波がデッサウにも押し寄せてきた。一八四八年の革命（「諸国民の春」）である。

震源地はまたしてもフランスだった。一八四八年二月、パリで革命が起こり[13]、その影響が瞬く間にヨーロッパ中に波及した。デッサウでは三月半ばに民衆が蜂起し、レオポルト・フリードリヒも自由主義的な内閣を認めざるを得なくなった。五月には改革派が多数を占める議会が発足し、一〇月には民主主義的な憲法が採択された。様々な立場の新聞や団体が作

られ、改革をめぐる議論が沸騰した。

だが、「春」は意外なほど短かった。すでにその年の末までに、ウィーンやベルリンでは反動派が巻き返しに成功していた。翌一八四九年三月には、プロイセン軍がベルンブルクに進駐し、デッサウでも反動派が勢いを増した。これに力を得たレオポルト・フリードリヒは、七月に改革派の大臣を解任、一一月には議会を解散した。そして一八五一年一一月、新憲法が停止されるに及んで、デッサウの「春」は完全に終わりを告げた。

デッサウ公国とケーテン公国が合併し、新たにアンハルト＝デッサウ＝ケーテン公国が樹立されたのは、革命の記憶も薄れかけた一八五三年のことである。その二年後、ベルンブルクではアレクサンダーが病のため政務から退き、妻のフリーデリケが摂政に就いた。しかし二人には子がなかったので、アレクサンダーの死とともにベルンブルク領もまたデッサウ家によって相続されることになった。かくして一八六三年、デッサウを都とするアンハルト公国が誕生したのである[14]。新しい公国の面積はおよそ二三〇〇平方キロメートル、人口は一九万人ほどであった。デッサウに居住していたのは、そのうちの一万六〇〇〇人程度。まだまださやかな町にすぎなかった。

3　工業都市への胎動

ドイツ史において話が錯綜するテーマの一つに、ドイツの工業化がある。錯綜の理由は明らかである。ドイツで工業化が始まった一九世紀前半には、そもそもドイツという国が存在しなかったからである。先に述べたように、ドイツ連邦は独立した君主国と都市からなる連合（同盟）にすぎず、決して一つの国ではなかった[15]。各領邦は独自に関税を定め、通貨や度量衡も統一されていなかった。当然、各領邦、地域における産業の種類や規模もまちまちで、それらはそれぞれの経済的、政治的、法的、社会的等々の条件の下で、異なった道筋を辿って発展または衰退していった。いささか誇張していえば、プロイセンの工業化とバイエルンの工業化はほとんど別の話だったのである。ドイツの工業化とは、こうした各地域における工業化を一括りにしたものといってよい。

だが一方で、そうした地域性を打破する推進力となったのも、この工業化だった。なぜなら近代の工業化は、人、モノ、資本が従来の枠を越えて流通するようになることと不可分だったからである。ドイツでいえば、関税をはじめとする領邦間の様々な障壁が取り除かれ、ドイツという新たなネットワークの下で各地域の産業が再編されていくことこそ、工業化の

前提であり、帰結に他ならなかった。一八七一年の統一国家（ドイツ帝国）の成立も、そうした流れの中で実現したものである。

したがってドイツの工業化を理解するには、各地域における産業の内在的な発展と、それらが地域の枠を越えて結びつき、変容していく過程を同時に見定めなくてはならない。その話が錯綜するのは、これらの動きがきわめて多極的で、確たる中心を欠いていたからなのである[16]。こうした事情は多かれ少なかれどこの国でも見出されるが、独立した領邦の集合体にすぎなかった当時のドイツでは、ことさらそれがドラスティックな形で現れざるを得なかったのである。

さて、デッサウである。今、地域の工業化ということを述べたが、アンハルトのような小国にあっては、そもそも工業化への内在的な動因そのものが乏しかった。最も人口の多かったデッサウでさえ、一八三〇年頃は、皮革、タバコ、帽子、織物などの手工業工場がいくつかあっただけで、商店の数も五〇に満たなかった。しかも手工業や商業はツンフトまたはイヌングと呼ばれた同業組合（同職組合）の規制を受けていたので、希望者が自由に参入することもできなかった。こうした規制は一八六〇年代まで続いた。

このデッサウを工業都市へと変貌させていく動因は、外部からもたらされた。プロイセン

である。ナポレオン戦争後、プロイセンは膨大な戦費支出による財政悪化のため、租税収入を増大させる必要に迫られていた。目をつけられたのが、国内関税と消費税だった。当時のプロイセンには東部だけで五七もの異なった関税表があり、各都市や地方で様々な消費税が課されていた。これらは国内交易の妨げとなっていたばかりでなく、徴税業務を非効率的なものにしていた。そこでプロイセンは一八一八年から二一年にかけて関税制度の抜本的な改革を行い、国内交易における関税・消費税を撤廃して関税の境界線を国境に一元化するとともに、国内を通過する（プロイセンで消費されない）物品に対しては通過税を課すことにした。これによりプロイセンは、国内交易の活性化と徴税業務の簡素化を図り、税収を増大させようとしたのである。

だがこの新たな関税制度は、他の諸邦に大きな憤激を巻き起こした。プロイセンの措置は自国の利益のみを優先させた大国の横暴とみなされたのである。特にアンハルトのようなプロイセン領内にある「飛地」諸邦にとっては、その影響は深刻だった。これらの諸邦が自領を越えて物品のやり取りをするには、必ずプロイセン領を通らなければならなかったからである。アンハルトをはじめとする諸邦は、プロイセンにこの関税措置の撤回を求めた。しかしプロイセンも譲るわけにはいかなかった。もし「飛地」に例外を認めると、そこが関税の

抜け道（密輸ルート）となってしまい、大変な損害を被ることになるからである。実際、国境の一部でブラウンシュヴァイクとも接していたアンハルトは、一時密輸基地のような有様となっていた。

プロイセンは妥協することなく「飛地」に圧力をかけ続け、小さな諸邦の経済は次第に追い込まれていった。窮した諸邦に残された道は、プロイセンの関税制度に参加し、支払った通過税の代償を得ることしかなかった。アンハルトも一八二六年にベルンブルク、二八年にデッサウとケーテンの順でこの関税制度に組み込まれていった。通貨や度量衡もプロイセンの定めた基準が採用された。こうしてアンハルトは、事実上プロイセンの経済圏に取り込まれることになったのである。それは、アンハルトが領邦としての独立性を少なからず失ったということを意味していた。しかし都市デッサウにとっては、小さな領邦の枠を越える扉が開かれたということでもあった。

その後の関税制度の動きも一瞥しておこう。プロイセンの関税政策は、領内の「飛地」の編入だけでは終わらなかった。というのも、当時のプロイセン領は、ベルリンを中心とした東部（ほぼ旧来からの領地）とナポレオン戦争後に獲得した西部（ラインラント、ヴェストファーレン）とに分断されていたからである。両者の間には、ハノーファー、ブラウンシュ

ヴァイク、ヘッセンなどの諸邦が並んでいた。プロイセン経済の統一のためには、この分断を克服する必要があった。

最初に切り崩されたのは、ヘッセン＝ダルムシュタットだった。一八二八年、プロイセンは同国と関税同盟を結び、分断克服への足掛かりを得た。これに対して、バイエルンとヴュルテンベルクは南ドイツ関税同盟を、ザクセン、ハノーファー、ブラウンシュヴァイク、ヘッセン選帝侯国などは中部ドイツ通商同盟を結成して、プロイセンの勢力拡大を阻止しようとした。しかし後者はあまりにも参加国が多く、利害関係が入り組んでいたため、なかなか一致した行動が取れなかった。そこにつけ込んだプロイセンは、一八三一年にヘッセン選帝侯国と関税条約を締結、東西領土の関税境界線を統合することに成功した。そしてこれを機に、バイエルン、ヴュルテンベルク、ザクセン、テューリンゲン諸邦が相次いでプロイセンと関税条約交渉を開始し、一八三四年一月一日をもってドイツ関税同盟が発足することとなった。加盟国は一八三六年までにバーデン、ナッサウなどを加えて二五となり、その域内人口は二五〇〇万人に達した。さらに一八四一年にはブラウンシュヴァイク、五四年にはハノーファーとオルデンブルクがその傘下に入り、関税同盟はオーストリアを除くドイツ連邦の大半を占める一大自由交易圏となった[17]。

プロイセンの関税制度に組み込まれていたアンハルトにとって、関税同盟の発展は潜在的な取引先の拡大を意味していた。デッサウの経済にも、一八三〇年代から少しずつ新たな動きが出てきた。一八三三年にはデッサウ公レオポルト・フリードリヒの保護の下、ユダヤ人の銀行家イツィッヒ・ヒルシュ・コーンを管理者とする領邦貯蓄銀行が設立された[18]。当初五〇〇〇ターラーで始まったこの銀行の預金総額は、一八四六年にはその一〇〇倍の五二万ターラーとなった。集まった資金は公債や鉄道、公共事業などに投資された。また領邦の外からも企業家が集まり、工場の設立や売買が行われるようになった。ライプツィヒ出身の毛織物商カール・ベンヤミン・ジーベルツが一八三二年に設立した紡績工場では、蒸気機関も用いられた。

だが、デッサウが工業都市へと生まれ変わるには、関税の自由化だけでは不十分だった。いくら法的に自由な交易圏が広がっても、交通手段が従来のままでは、流通の規模は限られていたからである。

古くから輸送の大動脈であったエルベ川については、一八二二年に沿岸諸邦によってエルベ川航行条令が施行され、輸送の自由が認められていた[19]。エルベ川の河口にはドイツ連邦のメンバーでもある自由都市ハンブルクがあり、海外との取引も容易だった[20]。しかし河川

輸送には地理的な限界があるため、それだけではデッサウの工業化は難しかった。内陸部に広がる交易圏の中でデッサウが次の一歩を踏み出すには、陸路による、より細かな輸送手段が必要だった。鉄道である[21]。

ドイツ最初の鉄道は、一八三五年一二月、バイエルンのニュルンベルク〜フュルト間で開業した。路線距離は六キロメートル。関税同盟の発足からほぼ二年後のことだった。プロイセンでは一八三八年に、最初の鉄道ベルリン〜ポツダム線が開通した。当時のプロイセン政府は、関税の場合と違って鉄道の建設には積極的ではなかったが[22]、この年の秋に鉄道法を施行して民間による鉄道建設を後押しするようになった。ベルリン〜ポツダム線は一八四六年にマクデブルクまで延伸され、首都と中部ドイツを結ぶ基幹路線となった。この工事を指揮したのが、のちにデッサウ工業化の核となる会社を設立するハンス・ヴィクトール・フォン・ウンルーである。

デッサウからエルベ川を六〇キロメートルほど下ったところに位置するマクデブルクは、当時ドイツ最大の砂糖（甜菜糖）産地として大きな発展の只中にあった。甜菜から砂糖を精製する技術は一九世紀初頭にベルリン出身の化学者フランツ・カール・アシャールによって確立されたが、ちょうど同じ頃、ナポレオンの大陸封鎖令（一八〇六年）によって砂糖の輸入が途絶

えたため、その技術が一気に広まることとなった。マクデブルク一帯は甜菜栽培に適した土壌・気候に恵まれており、その利を生かして多くの甜菜畑や製糖工場が設けられた。ベルリン〜マクデブルク線が開通する頃には、マクデブルク周辺の一七の企業だけで関税同盟全体で収穫される甜菜のおよそ三分の一を賄っていた[23]。ベルンブルクとケーテンはこの製糖地帯の縁に当たり、すでに一八三〇年代には公国内に製糖工場が存在した。少し離れたデッサウでも一八七一年に製糖工場が設立されるが、のちにこの工場がデッサウの歴史に暗い一頁を刻むことになる。

アンハルトを経由する最初の鉄道は、このマクデブルクを起点として敷設された。手掛けたのは民間のマクデブルク・ライプツィヒ鉄道会社で、一八四〇年にマクデブルクからケーテンを経て、ハレ、ライプツィヒに至る路線を開通させた。ハレとライプツィヒは古くからの商都で、特にライプツィヒはドレスデンと並ぶザクセン王国の流通の要だった。ケーテンに鉄道が通ったのも、マクデブルクとライプツィヒの中間に位置したという地の利によるところが大きかった。

一方、デッサウを経由する鉄道については、ベルリンで話が進められていた。ベルリン〜ポツダム線の開業直後から、ベルリン・アンハルト鉄道会社がベルリンとハレを結ぶプロイ

セン初の長距離路線の建設を計画していたのである。経由地に当たるデッサウでは、君主のレオポルト・フリードリヒ自らが無償で土地や資材を提供するなど、この計画を強力に後押しした。その結果、マクデブルク〜ライプツィヒ線の開通からわずか三か月後にはデッサウ〜ケーテン線が開通し、翌一八四一年にはこの路線がロスラウ、ヴィッテンベルクを経由して、ベルリンまで延伸された[24]。かくしてデッサウは、成長著しいマクデブルクより五年も早く、ベルリンと鉄道で結ばれることになった。ケーテン経由ではマクデブルク、ハレ、ライプツィヒに繋がり、マクデブルクからはブラウンシュヴァイクやハノーファーへ、ハレからはテューリンゲンへ、ライプツィヒからはドレスデンへ出ることができた[25]。デッサウの流通網に新たな時代が訪れたのである[26]。

関税同盟の成立と鉄道の開通によって、デッサウの経済は外に向かって大きく開かれ始めた。流通の拡大は町にこれまでとは違った需要を喚起し、工業化への土壌を育んでいった。だが別の面から見ると、このことは、アンハルトの特殊性を際立たせることにもなった。なぜならアンハルトは、地理的・経済的にはほぼプロイセンに取り込まれていたものの、政治的には依然として「独立国」だったからである[27]。経済の壁が低くなればなるほど、逆に政治の壁が意識されるようになっていった。そしてその壁は、アンハルトに集う人々にとって

必ずしも障壁ではなく、むしろプロイセンに対する防壁として役立っていた。アンハルトの同意がない限り、プロイセンの法律はアンハルトでは通用しなかった。プロイセンでは許可されないことも、アンハルトでは許可される可能性があった。無論、プロイセンがその気になって圧力をかければ、アンハルトもそれに従わざるを得なかったが、それでもプロイセンの中（飛地）にあってプロイセンではないというその独特な立ち位置は、アンハルトに特別な存在感をもたらしていたのである。その両者の関係がよく表れたのが、一八四六年の株式銀行設立をめぐる動きだった。

一八四〇年代までのドイツの金融業はいまだ個人銀行が主体で、工業化の進展に伴う資金需要の増大に応えられないでいた。そのため産業界では株式会社組織の信用銀行の設立を求める声が高まったが、プロイセン政府はそれを認めようとしなかった。巨大な株式銀行の存在は、政府の経済財政政策の妨げになりかねないと考えられたからである。

そこで動いたのが、デッサウだった。資本力のないデッサウでは、政府も株式銀行の設立に乗り気だったのである。大きな資金需要のあるルールとシュレージエンの中間に位置するという地の利もアピールすることができた。一八四六年三月、デッサウで会合がもたれ、全ドイツ規模の株式信用銀行となるべき「ドイツ銀行」の設立が決められた。資本金の目標は

一〇〇〇万ターラーだった。

ところがこの計画は、プロイセンの措置によりあっけなく潰えてしまう。同年四月、プロイセンが民間資本の参加を受け入れるプロイセン銀行の設立に動いたのである[28]。資本金は国からの出資が一〇〇万ターラー、民間からの募集が一〇〇〇万ターラーで、経営はプロイセンの官僚からなる銀行管理委員会が監督するとされていた。こうなっては、もはやデッサウの出る幕はなかった。期待された出資者は皆プロイセン銀行に走り、デッサウの「ドイツ銀行」には目標の四分の一程度の資金しか集まらなかった。

しかしそれでも、デッサウは株式銀行の設立そのものは諦めなかった。プロイセンとは比較にならないにせよ、デッサウの資金需要もそれなりに大きくなっていたからである。銀行は身の丈に合った「アンハルト＝デッサウ領邦銀行」と命名され、一八四七年一月に開業した[29]。頭取に就任したのは、最大の出資者でもあった銀行家のフリードリヒ・ルイス・ヌラントである。

さてこうして一八四〇年代、デッサウには鉄道と銀行がもたらされ、様々な産業需要の種がまかれていった。またささやかではあるが、人口も年々増加し、彼らの生活を支える商店なども増えていった。もちろん、誰もがこうした動きを歓迎したわけではなかった。新たに

やってきた企業家たちの行動は、旧来の特権を守ろうとする手工業者らとの軋轢を生み、それが一八四八年の革命運動の一因ともなった。だが、それはそれでやはり必要な時間であったというべきだろう。なぜなら、その騒動の渦中で種々の利害が調整され、来るべき離陸のための滑走路が準備されたからである。

やがて革命の季節が去り、二つの公国が一つになる。いよいよデッサウは工業都市に向けて離陸を開始するのである。その駆動力となったのは、一八五五年に資本金五〇万ターラーをもって設立されたドイツ・コンチネンタル・ガス会社であった。設立者は先に名前を挙げたウンルーとヌラント。彼らもまたプロイセンからやってきた者たちだった。

次回はこのコンチネンタル・ガス会社の発展を軸に、デッサウの工業化の過程を見ていくことにしたい。

注

1　Bundesagentur für Arbeit (2020) より算出。

2　当時バッハはザクセン＝ヴァイマール公国の楽師長を務めていたが、事前に許可を得ることなくケーテンからの申し出を受けたため、ヴァイマール公の怒りを買い、一か月ほどの禁錮処分を受けた。

3　私生活では、最初の妻マリア・バルバラの死（一七二〇年）、アンナ・マグダレーナとの再婚（一七

二一年）など、波乱に富んだ時代でもあった。ちなみに息子の音楽家カール・フィリップ・エマヌエル・バッハは前妻の子、ヨハン・クリスティアン・バッハは後妻の子である。彼らはモーツァルトやベートーヴェンなど次世代の音楽家に大きな影響を与えた。

4 家督は継いだものの、フランツは年少であったため、一七五八年まで叔父のディートリヒが摂政を務めた。

5 ブランデンブルク＝シュヴェート家は、代々プロイセンとデッサウ家を繋ぐ鎹のような役割を果たしていた。ルイーゼの父方の祖母はヨハン・ゲオルク二世の娘（レオポルト一世の妹）、母はレオポルト一世の娘（フランツの父マクシミリアンの妹）である。フランツとルイーゼは従兄妹同士であった。

6 一七七一年、フランツは汎愛派の教育者ヨハン・ベルンハルト・バゼドウをデッサウに招いた。バゼドウは三年後、全九巻からなる教育学の『基礎教程』を発表し、自身の理念に基づいた寄宿学校「汎愛学舎」を設立した。この新しい学校はドイツの教育界に大きな反響を呼び、一七七六年に行われた公開試験の際にはドイツ中から多くの見学者が集まった。しかし程なく教師陣の内紛や財政問題などから運営がうまくいかなくなり、汎愛学舎は一七九三年に閉鎖となった。

7 よく知られた啓蒙専制君主に、農奴制を廃止したバーデン辺境伯のカール・フリードリヒ、若きゲーテを閣僚に迎えたザクセン＝ヴァイマール公のカール・アウグストらがいる。

8 ピョートルは元々シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン＝ゴットルフ公爵家の当主で、ドイツ語名をカール・ペーター・ウルリヒといった。ロシアの皇帝エリザヴェータ（ピョートル一世の娘）に子がなかったため、姉の子である彼が養子に迎えられたのである。ゾフィーは彼の又従妹に当たる。

9 一八〇三年の帝国代表者会議主要決議によって、教会領の世俗化と小邦の陪臣化の方針が取り決められた。そして一八〇六年、ナポレオンの主導によってライン同盟が結成されると、皇帝フランツ

二世は帝国の維持を諦め、自ら退位を宣言した。
ザクセンの場合は事情が違った。ウィーン会議においてザクセンは、王号こそ維持できたものの、領土の北半分をプロイセンに割譲することを余儀なくされた。そしてこれによってアンハルトは、ブラウンシュヴァイクに接した西側の飛地（ベルンブルク領）のごく一部を除く国境のほぼすべてをプロイセンに囲まれることになった。
アンハルトには、フランス国境から遠く、プロイセンとザクセンの緩衝地帯であるという地政学的利点があった。ナポレオンにとっても対仏大同盟側にとっても、アンハルトは手ごろな駒に見えたのである。
デンマークと同君連合を形成していたホルシュタイン公国とザクセン＝ラウエンブルク公国は、合わせて一つと数えられる。また弟系ロイス侯国は、当時ロイス＝ローベンシュタイン、ロイス＝シュライツ、ロイス＝エーベルスドルフの三侯国に分かれていたので、これらを別々に数えると計四一ということになる。
二月革命。国王ルイ＝フィリップが退位し、第二共和政が成立した。
一六〇三年にアンハルトの分割が取り決められてから、実に二六〇年ぶりの統一であった。デッサウ家の初代ヨハン・ゲオルク一世は、レオポルト一世の曾祖父に当たる。
ウィーン体制の立役者となったオーストリアの宰相メッテルニヒは、分裂状態にあったイタリアを「地理的概念」と述べたが、当のドイツも似たようなものだったのである。
プロイセン中心史観は、後代からの見立てにすぎない。プロイセンの工業化だけを取っても、その動きは多極的だった。
関税同盟の拡大はドイツ統一への機運を盛り上げたが、この同盟が直ちにドイツ帝国の成立に結びついたわけではなかった。もともと関税同盟は様々な条約の束によって成り立っており、加盟国間

18 には立場の相違があった。プロイセンがドイツにおける覇権を確立した普墺戦争（一八六六年）でも、関税同盟の加盟国が敵味方に分かれて戦った。

19 イツィッヒの息子モーリッツは、立志伝中の人物である。父を継いでデッサウの銀行家となったモーリッツは、一八四八年、三月革命の混乱を避けてロンドンに亡命していたプロイセンの王弟ヴィルヘルム（のちのヴィルヘルム一世）に多額の援助を行い、彼から絶大な信頼を得た。帰国後、革命を鎮圧したヴィルヘルムは、プロイセンの摂政、国王、さらには初代のドイツ皇帝へと昇り詰めていくが、モーリッツに対する信頼は変わらず、彼を宮廷銀行家に任じ、その財産の管理・運用を任せた。もちろん、これによってデッサウとの縁が切れたわけではなく、モーリッツはアンハルトの宮廷銀行家も兼務していた。銀行家として彼は様々な事業に投資したが、中でも力を入れたのが鉄道だった。モーリッツが亡くなったのは一九〇〇年。墓はデッサウにある。

20 デッサウは、南からエルベ川に合流するムルデ川の左岸にある。合流点の北側（エルベ川の対岸）にある町が、二〇〇七年にデッサウと合併したロスラウである。

21 但し、ハンブルクは関税同盟には加盟していなかった。

22 無論、鉄道が開通しても、エルベ川がデッサウにとって重要な輸送路であることに変わりはなかった。一八三九年にはマクデブルク～ドレスデン間（デッサウはその途中に位置する）に最初の蒸気船が就航し、以後エルベ川の輸送量も大きく伸びていった。ただ、いくらエルベ川の輸送量が増えても、次々と路線を広げていく鉄道のそれには及ぶべくもなかったのである。

鳩澤は、当時のプロイセン官僚が国家主導の鉄道建設推進に反対した理由を次のようにまとめている。「①鉄道の収益性への疑問、②舗装国道など既存の交通インフラとの利害対立、③現下の国家財政逼迫、④鉄道投機の過熱への心配、⑤他邦との鉄道連絡によるプロイセン王国の政治的独立性の低下」（鳩澤　二〇二〇、五六～五七頁）。つまり彼らは、自由交易圏（関税同盟）は拡大するけ

れども、その中を移動する交通手段は従来のまま（徒歩、馬、馬車、船）で、領邦の政治的独立性は堅持する、という姿を思い描いていたのである。

23 二〇世紀初頭にドイツ（帝国）は世界一の砂糖生産国となった。砂糖は当時のドイツで二番目に大きな輸出品であり、マクデブルクは国際的な砂糖取引の中心地だった。

24 この時設けられたのが、現在ファサードの一部（一八八〇年竣工のもの）のみが遺構として残されているベルリン・アンハルト駅である。往時のアンハルト駅はベルリンから南方面への玄関口として大きな賑わいを見せたが、第二次世界大戦時の空襲で破壊され、一九五二年に廃駅となった。ちなみに、ベルリン〜デッサウ間の距離は、東京〜甲府間とほぼ同じである。一八六三年に成立したアンハルト公国の面積は、現在の山梨県（四四六五平方キロメートル）の半分強、東京都（二一九四平方キロメートル）より少し大きいくらいとなる。

25 マクデブルクとドレスデンへは、エルベ川の舟運も利用することができた。

26 その後、ベルリン・アンハルト鉄道会社は、一八五七年にデッサウ〜ビッターフェルト線、五九年にビッターフェルトからハレ、ライプツィヒに分岐する路線を開通させた。また同じ年には、ヴィッテンベルクからデッサウを経由（迂回）せずにビッターフェルトへ向かう路線も完成させた。これによりデッサウは、ベルリン〜ハレ／ライプツィヒ線の経由地ではなくなったが、石炭（褐炭）の産地であったビッターフェルトと結ばれ、ケーテンを経由することなくハレ、ライプツィヒに出られるようになった。

27 関税同盟との関係にしても、アンハルトはプロイセンの関税制度を通じてそこに組み込まれていただけで、独立したメンバーではなかった。しかしドイツ連邦議会では、独立した君主国として投票権をもっていた。

28 一八四六年四月の内閣令によってその基本方針が定められ、一〇月の銀行令によって詳細が規定さ

れた。この銀行はプロイセンの中央発券銀行となり、ドイツ帝国の成立後、ライヒスバンク（帝国銀行）に改組された。

29 アンハルト＝デッサウ領邦銀行は銀行券の発券も行い、その一部はプロイセンでも流通していた。しかし一八五七年の恐慌を機にプロイセンが国外銀行券の流通を禁止したため、その流通高は激減することになった。

参考文献

Beckus, Paul: Hof und Verwaltung des Fürsten Franz von Anhalt-Dessau (1758-1817), Mitteldeutscher Verlag, Halle (Saale), 2005.

Beckus, Paul: Land ohne Herr – Fürst ohne Hof?: Friedrich August von Anhalt-Zerbst und sein Fürstentum, Mitteldeutscher Verlag, Halle (Saale), 2018.

Bundesagentur für Arbeit: Zahlen, Daten, Fakten; Strukturdaten und -indikatoren (Agentur für Arbeit Dessau-Roßlau / Wittenberg), Berlin, Dezember 2020.

Historische Kommission bei der Bayerischen Akademie der Wissenschaften / Bayerische Staatsbibliothek: Deutsche Biographie (https://www. deutsche-biographie.de/).

Höroldt, Ulrike / Pabstmann, Sven (Hrsg.): 1815: Europäische Friedensordnung – Mitteldeutsche Neuordnung, Mitteldeutscher Verlag, Halle (Saale), 2017.

Kreissler, Frank: Dessau bis 1900, Mitteldeutscher Verlag, Halle (Saale), 2015.

Kunz, Andreas (Hrsg.), Blume, Dorlis (Bearb.): Beschreibungen von Staaten, Provinzen und Regierungsbezirken in Deutschland 1820-1914, Mainz, 2008.

Landesheimatbund Sachsen-Anhalt e. V. (Hrsg.): Geschichte Sachsen-Anhalts II, Reformation bis Reichsgründung 1871, Koehler & Amelang, München / Berlin, 1993.

Studium Hallense e.V. (Hrsg.): Geschichte Anhalts in Daten, Mitteldeutscher Verlag, Halle (Saale), 2014.

Tullner, Mathias: Die Revolution von 1848/49 in Sachsen-Anhalt, Mitteldeutscher Verlag, Halle (Saale), 2014.
キーゼヴェター、フーベルト『ドイツ産業革命―原動力としての地域―』、高橋秀行・桜井健吾訳、晃洋書房、二〇〇六年。
蔵本忍「一八一八年のプロイセン関税法について」、明治大学政治経済学部『政經論叢』第五三巻（四―六）、一九八五年。
鳩澤歩『鉄道のドイツ史』、中央公論新社、二〇二〇年。
樋口隆一『バッハ』、新潮社、一九八五年。
肥前栄一『ドイツ経済政策史序説　プロイセン的進化の史的構造』、未来社、一九七三年。
モテック、ハンス『ドイツ経済史　一七八九―一八七一年』、大島隆雄訳、大月書店、一九八〇年。
諸田實他『ドイツ経済の歴史的空間―関税同盟・ライヒ・ブント―』、昭和堂、一九九四年。
若尾祐司・井上茂子（編著）『近代ドイツの歴史　一八世紀から現代まで』、ミネルヴァ書房、二〇〇五年。

Once upon a Time in Dessau: Portrait of a Provincial Industrial City (1)

Dessau is a small city in Saxony-Anhalt state which belonged to the former East Germany. Since the German reunification in 1990, its economy has been stagnant and the population, especially of young generation, has continued to decline. It was once the capital of the Duchy of Anhalt, which was established in 1863, and played an important role in the industrialization of Central Germany. After the end of the Duchy in 1918, the Junkers, well known as the manufacturer of the world's first all-metal aircraft, was founded and the Bauhaus, one of the most influential design schools in the 20th century, moved there. On the other hand it has a dark history in the Nazi era. This study is an attempt to analyze and interpret several aspects of German history from the viewpoint of a provincial industrial city. In this first part of the study, I trace the history of Anhalt to the birth of the Duchy and clarify the preconditions for the industrialization of Dessau.

武田竜弥 ｜ Tatsuya TAKEDA
名古屋工業大学大学院工学研究科
ドイツ文学・感性社会学
教授